

マドゥスーダナ・サラスヴァティー による *Bhāgavata Purāṇa* の受容方法

——『バーガヴァタ註』概観——

眞鍋 智裕

随伴と相違に基づいて、それからこの〔世界の〕生起等があり、諸の対象に対する識者であり、自照者であり、最初の詩聖に心によってブラフマン（ヴェーダ）を繰り広げた〔者であり〕、それについて賢者達が惑乱し、それにおいて火、水、土の交替に応じた三つの創出が偽りである、自身の威光によって常に欺瞞を離れている〔その〕最高の真理を、〔私達は〕瞑想しよう。

偉大な聖仙によって作られた、この聖なるバーガヴァタにおいて、この世において欺瞞を完全に捨てた最高の規範とは、嫉妬のない賢者達にとって知られる、実際に存在する実在物であり、幸福を与える、三つの苦しみを根絶するものであると〔説かれる〕。或いは、どうして諸の他のものによって、主宰神は心に即座に留めおかれるだろうか。これ（バーガヴァタ）を聞こうと願う巧妙な者達によって、〔主宰神は心に〕その瞬間に〔留めおかれる〕。ああ、シユカの口から地上に溢れ落ちた、聖句という如意樹の、アムリタの滴りを持つ精要であるバーガヴァタという果実を、帰滅するまで絶えず飲め。情趣に通じた者達よ、審美者達よ。

『バーガヴァタ・プラーナ』1.1.1-3.¹

1. はじめに

「プラーナ」（*Purāṇa*、古譚）文献は、形態の上では、特に、紀元後4,5世紀頃までに現形を整えたと考えられる叙事詩『マハーバーラ

タ』 (*Mahābhārata*, 以後 MBh と表記) の後を承けて編纂された, その名を冠した複数の文献の総称である. その所説は宇宙論や哲学, 詩学, 政治学等多岐に渡り, プラーナ文献は一種の百科全書的な性格を持っている. その数としては, 18 の「大プラーナ」 (*Mahāpurāṇa*) と, 同じく 18 の「副プラーナ」 (*Upapurāṇa*) が挙げられ², 最も古いものでも 5 世紀以降に現形を整えていったと考えられる, インド正統派思想³の「聖典」の中でも比較的后代に成立したものの一つである. また 36 のプラーナは, ヴィシュヌ教 (*Vaiṣṇava*) 或いはシヴァ教 (*Śaiva*) のいずれかに分類されており, ヴィシュヌ (*Viṣṇu*) 神信仰やシヴァ (*Śiva*) 神信仰の進展に応じて編纂されていったことが伺われる.

一方, 本稿で取り上げる不二一元論学派 (*Advaita*) は, 正統派思想のうち, 広義のヴェーダ聖典 (*Veda*)⁴に含まれる「ウパニシャッド」 (*Upaniṣad*) 文献群の統一的解釈を旨とするヴェーダーンタ学派 (*Vedānta*) の現存最古の一派である. その主要教説は, 端的に言えば, この世界においては唯一の精神原理であるブラフマン (*brahman*) のみが実在し, その他の一切のものは究極的には実在しない幻影のようなものであること, また, 我々生類の精神原理であるアートマン (*ātman*) がブラフマンと全く同一であること (*brahmātmaikya*, 梵我一如) を自ら知ることによって, 輪廻世界から解脱することができる, というものである.

この不二一元論学派の開祖シャンカラ (*Śaṅkara*, ca. 756-772⁵) は, ヴェーダーンタ学派の根本経典『ブラフマ・スートラ』 (*Brahmasūtra*, 以後 BS と表記) に対して『ブラフマ・スートラ註解』 (*Brahmasūtrabhāṣya*, 以後 BSBh と表記) を, 特定の「ウパニシャッド」に対して「ウパニシャッド註解」 (*Upaniṣadbhāṣya*) を, MBh の一部をなす『バガヴァッド・ギーター』 (*Bhagavadgītā*, 以後 BhG と表記) に対して『バガヴァッド・ギーター註解』 (*Bhagavadgītābhāṣya*, 以後 BhGBh と表記) をそれぞれ著している. そのため, その後の不二一元論学派の思想的営みは, BS, ウパニシャッド文献群, BhG を軸として展開していった⁶.

しかしシャンカラの時代には, 36 あるプラーナ文献のうち, まだ

ほとんどのプラーナ文献が成立しておらず、シャンカラ自身、プラーナ文献を、天啓聖典 (Śruti) であるヴェーダ聖典に対する伝承聖典 (Smṛti) として言及することはあるものの、特にプラーナ文献を重視することはない。シャンカラ以降の不二元論学匠達のプラーナ文献に対する態度も同様で、ウパニシャッド文献群、BS, BhG と比べて、特に 8 世紀ころから 13 世紀までの不二元論教学において、プラーナ文献が議論の全面に出てくることはなかった⁷。

このような中、16 世紀頃に活動した不二元論学匠マドゥスーダナ・サラスヴァティー (Madhusūdana Sarasvatī, 以後マドゥスーダナと表記) は、18 大プラーナの一つ『バーガヴァタ・プラーナ』 (*Bhāgavata Purāṇa*, 以後 BhP と表記) の冒頭三頌に対して、註釈『聖バーガヴァタの第一巻の冒頭三頌註』 (*Śrīmadbhāgavataprathamaskhandādyapadyatrayavyākhyā,⁸ 以後『バーガヴァタ註』⁹ 或いは ŚBhPĀTV と表記) を著している。管見では、マドゥスーダナの『バーガヴァタ註』は、不二元論学派の学匠が著した、現在公刊されているプラーナ文献に対する唯一の註釈であり⁹、不二元論教学史において新しい聖典であるプラーナ文献をどのように受容したのか、ということ考察する上での重要な文献である。また BhP は、8 世紀から 10 世紀にかけて成立したと考えられている、ヴィシュヌ教の一派であるバーガヴァタ派 (Bhāgavata) の聖典であり、ヴィシュヌ教諸派において重視されてきた¹⁰。また、BhP にはヴィシュヌ神やヴィシュヌ神の諸の化身の物語が説かれており、現代においてもヴィシュヌ教徒の間で親しまれ続けている。そのため、『バーガヴァタ註』は不二元論教学とヴィシュヌ教教学との関わりを考察する上でも非常に重要な文献である。

以上のように、マドゥスーダナの『バーガヴァタ註』は重要な文献であるが、従来の研究においては脚光を浴びることなく、十分に研究されてこなかった¹¹。そこで本稿では、マドゥスーダナの『バーガヴァタ註』を概観することによって、マドゥスーダナが BhP をどのように解釈し、受容したのか、ということ考察したい¹²。そして、そこから垣間見えるマドゥスーダナの『バーガヴァタ註』著述意図に関しても言及したい。

2. 『バーガヴァタ註』概観

2.1. BhP はヴェーダ聖典よりも権威は劣っている

これから、マドゥスーダナの『バーガヴァタ註』を概観していくが、先ず基本的な前提として、マドゥスーダナが BhP をどのような「聖典」として見做していたか、ということを確認しておきたい。マドゥスーダナは、彼の著作『種々の体系』(Prasthānabheda, 以後 PBh と表記)において、プラーナ文献一般をヴェーダ聖典の副補助学 (upāṅga) であると述べている¹³。これは、ヴェーダ聖典に比べてプラーナ文献の権威は低い、ということの意味している。さらに、『バーガヴァタ註』においても、ヴェーダ聖典の一部である諸ウパニシャッドが「天啓聖典」と呼ばれているのに対して、BhP は「教義書」(śāstra) と呼ばれている¹⁴。この教示書のなかには、シャンカラが「伝承聖典」として扱う諸法典や MBh, さらに BS といった「根本経典」(sūtra) も含まれている¹⁵。そのため『バーガヴァタ註』においても、BhP はヴェーダ聖典よりも権威の低い「聖典」と考えられていることが、ひとまずは指摘できよう。

以上のことから、マドゥスーダナは、一般的に BhP をヴェーダ聖典に匹敵する「聖典」とは考えていなかったとすることができる。

2.2. BhP の対象とは何であるか——BhP 1.1.1 の解釈

続いて、マドゥスーダナの『バーガヴァタ註』の内容の概観に移りたい。既述の通り、『バーガヴァタ註』は、BhP の冒頭三頌に対する註釈であり、その BhP 冒頭三頌は BhP 全体の趣意を要約した導入句に該当している。BhP は中規模の分量を持つプラーナであるため、マドゥスーダナは BhP 全体にわたって註釈を付すのを避け、その趣意の要約に該当する冒頭三頌に対して註釈を付すことで、彼の BhP 解釈を表明していると考えられる¹⁶。

マドゥスーダナの解釈に依れば、BhP 冒頭三頌は、それぞれ

1) BhP の全文章の指し示す対象 (BhP 1.1.1)

2) BhP の目的は他の全ての教示書によって果たされていないこと (BhP 1.1.2)

3) BhP こそが人間の最高の目的であること (BhP 1.1.3)

を述べたものである。そこで先ず、マドゥスーダナが、何が1) BhP の全文章の指し示す対象であると解釈したのかを見ていきたい。

BhP 1.1.1 は、「最高の真理を瞑想しよう」(param satyaṃ dhīmahī) という主文と、その「真理」を形容するその他の副文から構成されている。マドゥスーダナは、この BhP 1.1.1 に対する『バーガヴァタ註』冒頭で、BhP の全文章の指し示す対象とは、この「最高の真理」(param satyaṃ) であると述べている¹⁷。次に問題となるのは、その「最高の真理」とは何であるのか、ということであるが、マドゥスーダナはこの「最高の真理」を、次の三つの立場からそれぞれ解釈している。即ち、

- ①ウパニシャッド論者 (Aupaniṣadika) , 即ち不二一元論学派の立場
- ②ヴィシュヌ教の一派であるサートヴァタ派 (Sātvata) の立場
- ③信愛 (bhakti) のみを愉しむ者 (Kevalabhaktirasika) , 即ちバーガヴァタ派の立場¹⁸

である。

2.2.1. 不二一元論学派の立場からの解釈

このうち、不二一元論学派の立場からの解釈においては、この学派はブラフマン=アートマンのみを实在であり、真実であると考えているため、当然のように「最高の真理」をブラフマン=アートマンであると解釈している¹⁹。さらにこの学派においては、大文 (mahāvākya) と呼ばれ、ウパニシャッドに見られる「汝はそれである」(tat tvam asi) という文²⁰の、それぞれ「それ」(tat) と「汝」(tvam) という単語の対象が、それぞれブラフマンとアートマンを対象としていることを確定させ、それから「汝はそれである」という文全体の対象、即ち梵我一如を確定させることが解脱知の獲得のために重要視されている。マドゥスーダナはこのことと関連付けて、BhP 1.1.1 における

「真理」を形容する副文を、「それ」という語の表示内容と表示対象（ブラフマン）を教示するものとして、さらに同様に、「汝」という語の表示内容と表示対象（アートマン）を教示するものとして、二通りに解釈している²¹。

2.2.2. サートヴァタ派の立場からの解釈

サートヴァタ派の立場からの解釈においては、ヴィシュヌ派の一派であるパンチャラートラ派（Pāñcarātrika）の教義ヴィューハ（vyūha）説を主題として議論が展開する。このヴィューハ説とは、世界創造に際して、ヴィシュヌ神が順次ヴァースデーヴァ（Vāsudeva）神、サンカルシャナ（Saṅkarṣaṇa）神、プラディユムナ（Pradyumna）神、アニルッダ（Aniruddha）神の姿を取る、というものである。しかし、サートヴァタ派の立場において、何故パンチャラートラ派のヴィューハ説が主題となるのであろうか。それは、マドゥスーダナはパンチャラートラ派所説のヴィューハ説を批判しつつも独自のヴィューハ説を述べており²²、自身の立場とパンチャラートラ派とを区別する必要があったため、仮に自身の立場をサートヴァタ派と呼んでいるのだと考えられる。本来は、サートヴァタ派とパンチャラートラ派には明確な区別は存在しない。

マドゥスーダナの主張するサートヴァタ派のヴィューハ説は、不二一元論学派の教説である「アートマンの四状態説」と密接な関係を持っている。「アートマンの四状態説」とは、ブラフマンが、制約条件（upādhi）の違いによって四つの状態を取ることであり、その四状態とは、

- 1) 全く制約条件を持たない第四位（caturtha）
- 2) 無明を制約条件とする熟睡状態（suṣuptasthāna）
- 3) 微細元素を制約条件とする夢眠状態（svapnasthāna）
- 4) 粗大元素を制約条件とする覚醒状態（jāgaritasthāna）

である。マドゥスーダナは、彼のヴィューハ説において、

- 1) 第四位をヴァースデーヴァ神
- 2) 熟睡状態をサンカルシャナ神
- 3) 夢眠状態をプラディユムナ神

4) 覚醒状態をアニルツダ神

にそれぞれ対応させている．そして BhP 1.1.1 の「最高の真理」を、制約条件を持たないブラフマンであるヴァースデーヴァ神であると解釈している²³．さらにマドゥスーダナは、「最高の真理」を形容する BhP 1.1.1 の副文を、ヴィューハ四神が、それぞれの制約条件と異なっていることを教示しているものと解釈している²⁴．

以上のように、サートヴァタ派の立場からの解釈は、ヴィューハ説というパンチャラトトラ派系の教義が主題となっはいるが、実際にはそのヴィューハ説は換骨奪胎され、不二一元論学派の教義によって基礎づけられている．

2.2.3. バーガヴァタ派の立場からの解釈

最後のバーガヴァタ派の立場からの解釈においては、サートヴァタ派の立場におけるヴァースデーヴァ神の化身 (avatāra) であるクリシュナ (Kṛṣṇa) 神が、「最高の真理」であるとされている²⁵．そしてマドゥスーダナは、「最高の真理」を形容する BhP 1.1.1 の副文箇所によって、「最高の真理」であるクリシュナ神が愛 (preman) や恋 (rati) の対象であること、またそのことと関連して、クリシュナ神が信愛の情趣 (bhaktirasa) の拠所 (avalambana) であり喚起条件 (vibhāva) であること等、クリシュナ神の様々な美質が説かれていると解釈している．これら様々な美質のなかでも、マドゥスーダナは、クリシュナ神を信愛 (bhakti) の情趣の拠所、つまり信愛の対象として理解すべきであると考えている²⁶．この信愛とは、一般的に最高神に対する絶対的帰依のことであり、ここでは最高神クリシュナに対する愛や恋の感情と同定されて議論されている．

このバーガヴァタ派の立場からの解釈において、以下のことが注目すべき点として挙げられる．即ち、不二一元論学派の立場やサートヴァタ派の立場においては、議論の典拠として引用されるのは主にウパニシャッド文献である²⁷のに対して、バーガヴァタ派の立場においては、議論の典拠として引用されるのは主に BhP そのものである、という点である．そのため、バーガヴァタ派の立場における解釈は、不二一元論学派とは無関係なものではないかという疑念も生じる．しかし、

ここでのクリシュナ神観は、マドゥスーダナの BhG に対する註釈『隠された意味の顕示』（*Gūḍhārthadīpikā*、以後『ギーター註』或いは GAD と表記）に見られるクリシュナ神観との齟齬はなく²⁸、また『ギーター註』のクリシュナ神観はシャンカラの BhGBh に依拠した不二一元論教学に基づくものである²⁹。そのため、バーガヴァタ派の立場における解釈も、不二一元論教学が根底にあると考えてよいだろう。

以上のように、マドゥスーダナは、BhP の全文章の指し示す対象である「最高の真理」を、不二一元論学派の立場においてはブラフマン＝アートマン、サートヴァタ派の立場においてはブラフマンであるヴァースデーヴァ神、バーガヴァタ派の立場においては、ヴァースデーヴァ神の化身であるクリシュナ神であると解釈している。ここで、クリシュナ神はヴァースデーヴァ神を本性としている、とも言われていることから、三つの立場全て、「最高の真理」をブラフマンと捉えている、と言っても大過はないと考える。このことは、マドゥスーダナは、それぞれサートヴァタ派とバーガヴァタ派のヴァースデーヴァ神やクリシュナ神を不二一元論学派のブラフマンとして受容した、ということである。ちなみにマドゥスーダナは、この三つの立場の違いは理解者の知力の違いによるものであると考えており³⁰、これら三つの立場に優劣をつけていない。

2.3. BhP の目的は他の全ての教示書によって果たされていない——BhP 1.1.2 の解釈

続いてマドゥスーダナは、BhP 1.1.2 に対する『バーガヴァタ註』において、BhP の目的は、他の教示書には果たされていないことを述べる³¹。その際に、諸の教示書を

- 1) 規範の知 (dharmajñāna) を目的とするもの
- 2) 真実の知 (tattvajñāna) を目的とするもの
- 3) 念想 (upāsana, upāsanā) を目的とするもの

のいずれかに分類し、BhP はそれらのいずれをも目的とするものでは

ないことを論じる³²。その際に、マドゥスーダナは

- 1) 規範の知を目的とする教示書を「行為篇」(karmakāṇḍa)
- 2) 真実の知を目的とする教示書を「知識篇」(jñānakāṇḍa)
- 3) 念想を目的とする教示書を「念想篇」(upāsanākāṇḍa)

と言い換えている³³。

この行為篇、知識篇、念想篇という三分類は、一般的にヴェーダ聖典に対する解釈を主とする広義のミーマーンサー (Mīmāṃsā) 学派の分類であり、行為篇と念想篇は前ミーマーンサー (Pūrvamīmāṃsā)、即ちヴェーダーンタ学派の姉妹学派であり祭事学派である狭義のミーマーンサー学派 (Mīmāṃsaka)、知識篇は後ミーマーンサー (Uttaramīmāṃsā)、即ちヴェーダーンタ学派のことを指している³⁴。しかし、『バーガヴァタ註』ではミーマーンサー学派やヴェーダーンタ学派以外の教示書も上述の三篇の何れかに分類されている。このことから、マドゥスーダナは諸の教示書を広義のミーマーンサー学派の枠組みで再構成しようと試みたということが伺われる³⁵。

マドゥスーダナは、BhP 1.1.2 を三つのパートに区分し、それぞれが行為篇、知識篇、念想篇の諸の教示書が BhP の目的を果たしていないことを述べたものと解釈する。

2.3.1. 規範の知を目的とする行為篇に関する議論

先ず、規範の知を目的とする行為篇の教示書に関して、マドゥスーダナは BhP 1.1.2 に見られる「最高の規範」(paramo dharmah) を「バーガヴァタの規範」(bhāgavatadharmā) と解釈している。この「バーガヴァタの規範」とは、ヴィシュヌ神に関する聴聞 (śravaṇa)、称賛 (kīrtana)、想起 (smaraṇa)、もてなし (pādasevana)、供養 (arcana)、崇拜 (vandana)、隷属 (dāśya)、親密さ (sakhya)、自身を捧げること (ātmanivedana) の九つの規範のことである³⁶。また、マドゥスーダナが主に BhP に基づいて著した信愛論の著作『信愛の霊薬』(Bhaktirasāyana、以後 BhR と表記) やその自註 (Bhaktirasāyanaṭīkā、以後 BhRṬ と表記) によれば、「バーガヴァタの規範」とは「手段としての信愛」(*sādhanaabhakti) のことである。BhR(T) には、「手段としての信愛」と「結果としての信愛」(*phalabhakti)

の二種類の信愛が説かれている³⁷。マドゥスーダナは、BhP 以外の行為篇の諸教示書にはこの「最高の規範」が説かれていないため、それらの教示書は BhP の目的を果たしていない、と主張する。

ここで具体的に上げられる行為篇の教示書は、『マヌ法典』（*Mānavadharmasāstra*）等の諸法典（*Dharmaśāstra*）、MBh、そして『ヴィシュヌ・プラーナ』（*Viṣṇu Purāṇa*、以後 VP と表記）である。そのうち諸法典に関しては、諸法典には多くの規範が説かれ、その果報はそれぞれ別であるが、「バーガヴァタの規範」は、その数は多くとも、「主の本質の獲得」（*bhagavatsvarūpaprāpti*）という一つの果報を持っているため、「バーガヴァタの規範」は諸法典に説かれている諸規範に再言及したものではないことが指摘されている³⁸。MBh と VP に関しては、マドゥスーダナも両者に「バーガヴァタの規範」、即ち手段としての信愛が説かれていることを認めている。しかし、MBh にはユディシュティラの行状等の口実のための嘘が説かれている点、また VP の「バーガヴァタの規範」は四姓（*varṇa*）・四住期（*āśrama*）に依存するものである点で、それらを欠いている BhP の「バーガヴァタの規範」は、MBh と VP 所説の「バーガヴァタの規範」とは異なったものである、とマドゥスーダナは述べる³⁹。以上のように、BhP の「バーガヴァタの規範」は他の教示書に説かれていないため、BhP の目的は行為篇の諸教示書によって果たされていないことが確かめられる。

2.3.2. 真実の知を目的とする知識篇に関する議論

真実の知を目的とする知識篇に関しては、マドゥスーダナは BhP 1.1.2 から「実際に存在する実在物がここにおいて知られるべきである」（*vāstavam vastu atra vedyam*）という文句を抜き出し、このうち「実在物」（*vastu*）を BhP 1.1.1 で述べられたもの、即ち「真理」であると解釈し、また「ここにおいて」（*atra*）をこの文章、即ち BhP と解釈する⁴⁰。このことによって、先ず BhP が真実の知を目的とする知識篇に含まれることを明示する。そのうえで、BhP の目的が知識篇の教示書である BS によって果たされていないことを述べる。

マドゥスーダナに依ると、BhP の目的が BS によって果たされていない理由は次のようなものである。BS においては、BhP 1.1.1 で述べられたヴァースデーヴァ神と呼ばれるブラフマンを知る資格は、ブラーフマナ、クシャトリヤ、ヴァイシヤという上位三種姓のみに許されており、女性やシュードラには許されていない。また、上位三種姓の者でも、愚鈍な者にとって BS によってブラフマンを知ることは難しい。一方、BhP においては、ブラフマンを知る資格は女性やシュードラにも許されており、またブラフマンが文学的に易しい表現で何度も解説されているため、全ての者が容易にブラフマンを知ることができる。このように、全てのものにブラフマンを知る資格が許されている点、また容易にブラフマンを知ることができる点で、BhP の目的は BS によって果たされていないというのである⁴¹。

ここでマドゥスーダナは、当時の現代の美文詩 (abhinavakāvya) も、全てのものに分かりやすくブラフマンを教えるものであるので、現代の美文詩が BhP と同等のものとなってしまふ、という反論を提起する。この反論に対してマドゥスーダナは、BhP は、BS と同じく、ヴィシュヌ神の化身であるヴィヤーサ (Vyāsa) 仙が作ったものであり⁴²、また「叙事詩とプラーナは第五のヴェーダである」と述べる BhP を引用し、作者が同じであったとしても、BhP の方が BS よりも優れていると指摘したうえで、まして BhP は現代の美文詩よりも優れている、と答えている⁴³。既に、マドゥスーダナは BhP をヴェーダ聖典よりは権威の低いものであると考えていたことを確認したが、ここから、マドゥスーダナは「第五のヴェーダ」⁴⁴として、BhP を BS よりも権威のあるものと考えていたことが確認できる。

2.3.3. 念想を目的とする念想篇に関する議論

念想を目的とする念想篇に関して、マドゥスーダナは『ナーラダ・パンチャラートラ』 (*Nāradapañcarātra*) 等のパンチャラートラ文献を念想篇の教示書として提示している⁴⁵。念想とは、『バーガヴァタ註』の定義に依ると「実在物それ自体に依拠しない、人間の意欲に過ぎず (*puruṣecchāmātra*)、彼の思考器官の行為作用 (*mānasakriyā*) の流れをあり方とするもの」⁴⁶とされているが、ここでは神を心に念じ

留めることと考えておいていいだろう。

マドゥスーダナは、BhP 1.1.2 の「主宰神は心に即座に、その瞬間に留め置かれる」（*īśvaro hṛdi sadyaḥ tatkṣaṇād avarudhyate*）という文句を解釈して、以下のように述べる。主宰神、即ちヴァースデーヴァ神は、念想する者達だけによってではなく、BhP を聞こうとする者達によっても、心に留め置かれる、即ち愛という綱（*premarasana*）によって心に繋ぎ止められる。しかも、ゆっくりではなく、即座に、BhP を聞こうとするその瞬間に、心に繋ぎ止められる。ここで重要なことは、BhP を聞こうとするだけで、ヴァースデーヴァ神が即座に心に繋ぎ止められるのであって、パンチャラートラ派のように、念想という具体的な行為を行う必要がないということである⁴⁷。マドゥスーダナは、このようなBhPの卓越性がパンチャラートラ文献にはないので、パンチャラートラ文献によってBhPの目的は果たされていない、というのである。

ところで、ここでは、ヴァースデーヴァ神が「心に留め置かれること」が「愛という綱によって心に繋ぎ止められること」と解釈されているが、これは「結果としての信愛」が意図されていると考えられる。BhRT に依ると「結果としての信愛」とは、「心が主（*bhagavad*）を形相（*ākāra*）とすること」⁴⁸であり、『バーガヴァタ註』の記述と、心の中に主ヴァースデーヴァ神が留まるという点が共通している。また「結果としての信愛」には、心が蕩けた状態（*dravāvasthā*）が必要とされる⁴⁹が、BhRT では、この心の蕩けた状態が愛情という綱（*praṇayaraśana*）と呼ばれており⁵⁰、『バーガヴァタ註』の「愛という綱によって心に繋ぎ止められる」という表現に対応している。以上のことから、念想篇の教義書に関する議論においては、マドゥスーダナは、BhP が「結果としての信愛」を容易に、しかも即座に達成できる、ということを示唆していると考えられる。

以上、BhP 1.1.2 に対する『バーガヴァタ註』の議論を概観してきた。その結果、以下のことが指摘できると考える。即ち、知識篇に関して、マドゥスーダナは、BhP によって四姓・四住期の区別なく、誰でも容易にブラフマンの知を得られることを述べていた。このことは、

知識篇がブラフマンの知を主題とする点で、伝統的な立場に沿ったものである⁵¹。しかしマドゥスーダナは、行為篇においては、BhPに「手段としての信愛」である「バーガヴァタの規範」が述べられていると主張し、また念想篇においては、BhPによって、即座に容易に「結果としての信愛」が達成されることを主張していた。これは、行為篇と念想篇が祭事学を主題とするミーマーンサー学派の教義書を指すという伝統説とは逸脱した解釈である。マドゥスーダナは、行為篇と念想篇に二種の信愛を適合させることによって、元来広義のミーマーンサー学派の伝統の枠外にあった信愛思想を、その中に取り入れようとしたのではないかと考えられる⁵²。

2.4. BhP こそが人間の最高の目的であること——BhP 1.1.3 の解釈

続いてマドゥスーダナは、BhP 1.1.3 に対する『バーガヴァタ註』において、BhP こそが人間の最高の目的 (paramapurusaṅārtha) であることを述べようとしている。インドにおいては、人間の目的として伝統的に愛欲 (kāma) ・実利 (artha) ・規範 (dharma) ・解脱 (mokṣa) の四つが立てられている。ここで、BhP こそが人間の最高の目的である、というのはどういうことであろうか。マドゥスーダナは、BhP 1.1.3 において「情趣 (或いは精要) であるバーガヴァタ」 (bhāgavataṁ rasam) というように、「情趣」 (rasa) と「バーガヴァタ」 (bhāgavata) が同格関係で述べられていることを次のように説明している。即ち、BhP は「信愛の情趣」 (bhaktirasa) の直接経験の独自の原因であるので、BhP が信愛の情趣と同一であることを述べようとして同格関係があるのである。さらに続けてマドゥスーダナは、信愛の情趣が BhP と同一であるので、BhP も人間の最高の目的である、と BhP が人間の最高の目的である理由を説明している⁵³。ここで問題となるのは、BhP は信愛の情趣と同一であるから人間の最高の目的であると説明されているが、ではその「信愛の情趣」が何故、人間の最高の目的であるのか、ということである。

マドゥスーダナは、BhRT において、信愛は独自の人間の目的 (pu-

ruṣārtha) であるのか、或いは上記四つの目的に含まれるのか、という問題を論じている。そこでは、信愛は独自の人間の目的であるとも、規範或いは解脱に含まれるとも述べている⁵⁴。この『バーガヴェタ註』においては、マドゥスーダナは、「信愛の情趣」は 1) 解脱の原因である、という解釈と 2) 信愛そのものを意味している、という二つの解釈を提示している。以下では、この点について確認したい。

2.4.1. BhP は解脱の原因である

マドゥスーダナは先ず、ヴェーダは多くの支派 (śākha, 枝) を持ち、人間の目的を授けるので、BhP 1.1.3 の語句「聖句という如意樹」(nigamakalpataru) をヴェーダのことであると解釈する。そして、BhP は何度も何度もヴェーダを考察して作られたものなので、BhP はその如意樹であるヴェーダの「果実」(phala) であり、全てのヴェーダの意味内容の「精要」(rasa) をまとめたものに相当し、それを教示するものである、と述べる。さらにマドゥスーダナは、BhP が教示する全てのヴェーダの意味内容の精要 (rasa) を、「情趣」(rasa) であることに掛けて、主 (bhagavat) に対する信愛であると考えている。そして、BhP 1.1.3 の「飲め」(pibata) という語を、BhP を聞くことで、心に取り込め、ということであると解釈する⁵⁵。

さらにマドゥスーダナは、「アムリタの滴りと結びついた」(amṛtadravasamyuta) という BhP 1.1.3 における「果実」であり「精要」である BhP の形容詞を、「解脱の到達と結びついた」と解釈し、BhP が解脱の到達の原因であると解釈している⁵⁶。また、「帰滅するまで」(ālayam) という副詞を、「解脱するまで」と解釈し、BhP 1.1.3 を、解脱の原因である BhP という果実であり精要を、解脱するまで聞いて心に取り込め、という意味に解釈している⁵⁷。

以上のように、ここでの解釈において、マドゥスーダナは「信愛の情趣」を解脱の原因として捉えており、BhP は解脱の原因と同一であるので、解脱という最高の目的である、と解釈していると考えられる。解脱の原因である BhP が、その結果である解脱という最高の目的と同一視されるのは可笑しいように思われるが、インドにおいては、「信愛」という語が、手段と結果の両方を表すように、手段や原因を指す

語によってその結果をも表すということがあり、この場合も、解脱の原因である BhP という語によって解脱という結果が表されていると考えることができる。そして、この BhP が解脱という最高の目的である、という解釈は、ヴェーダ聖典によってブラフマンの知を獲得することで解脱に至ることを人間の最高の目的とする、不二一元論学派の立場に基づくものであると言えよう。

2.4.2. BhP は信愛の情趣そのものである

続いてマドゥスーダナは、別の解釈を提示する。この解釈においては、BhP 1.1.3 の *rasa* という語は信愛の「情趣」の意味で捉えられ、主に対する信愛であると解釈されている。また、その「情趣」である *phala* は、ここでは「結果」と捉えられ、全ての善行の結果であるとされている。さらに、「帰滅するまで」は、主への信愛という情趣は心の帰滅の原因である⁵⁸ので、「思考器官が帰滅するまで」という意味で解釈されており、主への信愛を心が帰滅するまで「飲め」(*pi-bata*)、即ち文字通り飲んで「味わえ」、というように解釈されている⁵⁹。

さらにマドゥスーダナは、その主への信愛がどのようなものであるのかということの説明したものとして、BhP 1.1.3 の「聖句という如意樹から溢れた」(*nigamakalpataror galitam*) という語句を解釈する。マドゥスーダナは、「聖句」を、第五のヴェーダとしての BhP であるとし、さらに、多くの支派(=枝)によって荘厳されている、つまり尊崇されているので、この BhP は如意樹でもある、と述べる。そして、この BhP から「溢れた」とは、BhP という美文詩(*kāvya*)によって詩的に表現された、ということであると解釈している⁶⁰。この解釈は、マドゥスーダナの「信愛の情趣」(*bhaktirasa*) が詩論におけるラサ理論に基づいていることに由来するものである。

マドゥスーダナはさらに、信愛の情趣を、どのようなものとして、何のために飲むのか、ということの説明するために、「情趣」に掛かる BhP 1.1.3 の「アムリタの滴の柵を」(*amṛtadravasam*)⁶¹ という語を註釈している。マドゥスーダナに依れば、「アムリタの滴」とは「解脱の境地」であり、「柵」という語によって、その解脱の境地を

劣ったものにする、ということが意図されている⁶²。このことは、信愛の情趣は解脱を目的とするものではない、ということの意味し、そのため後には、信愛の情趣を直接経験した者は、天界に生まれ変わることに、解脱に至ることに言及しない、と述べられている⁶³。この、信愛の情趣が天界も解脱も目的としていないということは、BhPの記述に基づいたものであり⁶⁴、そのため BhP に依拠して著されたマドゥスーダナの BhRT においても、信愛の結果は主への愛の高まりである⁶⁵とされ、信愛の階梯の最終段階である「愛の最高の極致」(premaḥ paramā kāṣṭhā)も、自身が死ぬことで主と別離することに耐えられない状態⁶⁶であるとされている。ここでは、死んだ後に天界に生まれ変わることや解脱することがその終極とされておらず、解脱に至るまでの全ての果報が期待されていない⁶⁷。

以上のように、この解釈においては、「信愛の情趣」とは信愛に他ならない。そして、BhP は信愛の原因であり、また結果である信愛そのものとも言われている。このように、BhP は信愛と同一のものであるので、信愛という人間の最高の目的であるのである。またそのことから、今まで信愛がバーガヴァタ派の立場において説かれていた文脈上、ここでの解釈はバーガヴァタ派の立場におけるものであることが理解される。

以上のように、BhP 1.1.3 に対する『バーガヴァタ註』を概観してきた。マドゥスーダナは、BhP に説かれている人間の最高の目的を、不二一元論学派の立場においては解脱であり、一方、バーガヴァタ派の立場においては信愛であると考えている。しかし、以上の解釈には一つ問題がある。マドゥスーダナは、不二一元論学派の立場において、全てのヴェーダの意味内容の「精要」を信愛であると解釈し、それが解脱の原因であると考えていた。しかし BhRT においては、既述の通り信愛は解脱の原因ではなく、さらに解脱の原因であるブラフマンの知と信愛とは明確に区別されている⁶⁸。そのため、信愛が解脱の原因であるとする『バーガヴァタ註』と、信愛とブラフマンの知を区別する BhR(T) は矛盾しているように思われる。

この点は以下のように考えることができよう。BhR(T) では、信愛

の情趣の結果として、ブラフマンの明知に相当する主の理解が生じることが述べられている⁶⁹。しかし、この段階は信愛の最終目標ではなく、その後もさらに上位の階梯が設定されており、最終的に既述の「最高の愛の極地」に達する。そのため、信愛の情趣が解脱を目的とするものではない、ということは、信愛の情趣によって解脱知が生じない、ということではないのである。不二元論学派の立場において、信愛が解脱の原因である、ということは、バーガヴァタ派の立場とは反対に、解脱知の生起以降の階梯を重視していない、ということであると考えられる。

しかし、もう一つ問題が残されている。既に、マドゥスーダナは **BhP** をヴェーダ聖典よりはその権威は低いが、「第五のヴェーダ」として **BS** よりは権威の高いものとして考えていることを確認してきた。しかしここでは、その「第五のヴェーダ」である **BhP** に説かれた信愛の情趣が、不二元論学派によってヴェーダ聖典の説かれた目的と考えられている解脱よりも価値の高いものと見做されていることである。マドゥスーダナは、**BhP** の方がヴェーダ聖典よりも権威が高いと名言してはいないため、このことから彼が **BhP** をヴェーダ聖典よりも権威が高いと考えていたとは断言できないが、最終的には、彼は **BhP** をヴェーダ聖典に匹敵するものと考えていたと考えられよう。

3. おわりに

ここまでマドゥスーダナの『バーガヴァタ註』全編を概観してきた。その結果、マドゥスーダナの **BhP** 解釈に関して、以下のことが指摘できよう。マドゥスーダナは、**BhP** に対して、大別すると不二元論学派の立場とバーガヴァタ派の立場との二つの立場から解釈を加えていると考えることができる⁷⁰。

そして、不二元論学派とバーガヴァタ派との関係に関して言えば、クリシュナ神の本性であるヴァースデーヴァ神をブラフマンと同一視したり、**BhP** 1.1.2 に見られる手段と結果の二種の信愛をそれぞれ行為篇と念想篇の枠組みの中に適合させようとしたり、信愛を主題とす

る BhP 1.1.3 に解脱を主題とする解釈を適合させようとしたりと、マドゥスーダナは、バーガヴァタ派にとって信愛の対象である主宰神と、信愛の教説とを、不二一元論教学によって基礎づけようとしていたことがうかがえる。しかし、BhP 1.1.3 に対する『バーガヴァタ註』に明らかなように、マドゥスーダナはバーガヴァタ派の教義を不二一元論教学の中に完全に解消してしまうことはなく、ブラフマンの知を獲得することによって解脱に至る不二一元論学派の救済論と、主宰神に信愛を捧げるといふバーガヴァタ派の救済論とを、別々のものとして認めている。

不二一元論学派の開祖シャンカラは BhGBh において信愛を無制約なブラフマンに対する瞑想であるとし、解脱に至るための救済論の中に解消してしまっている⁷¹。そのことと対比させると、この解脱へ至る救済論と主宰神への信愛という救済論を別々のものとして認めるといふことは、非常に特異である。マドゥスーダナのこのような態度は、当時勢力を増していた、主宰神への信愛を救済手段とするヴィシュヌ教諸派やシヴァ教諸派に対抗する⁷²ためであったと考えられる。そのため、彼らの信愛の教説に大きな影響を与えていた、解脱の道とは異なる BhP の信愛の教説を不二一元論教学によって基礎付け、取り入れようとしたのだと考えられる。

またマドゥスーダナには、同じく BhP に基づく BhR(T) という信愛論の著作もあった。彼は、この BhR(T) によっては、バーガヴァタ派の信愛の教義を不二一元論教学によって基礎付け、体系化することを目的としていたと考えられる⁷³。この BhR(T) と比較すると、マドゥスーダナは『バーガヴァタ註』を著すことで、信愛の教義を説くものとしての BhP を、「第五のヴェーダ」として不二一元論によって基礎付けようとした、と想定することができる。

(本稿は、科研費 17J00156 の助成を受けたものである)

参考文献

一次資料

- BhP *Bhāgavata Purāṇa* (Vyāsa): *Śrīmadbhāgavata-Mahāpurāṇa: "Śrīdhārī"ṭīkopetam*. Ed. Paṇḍita Rāma teja Pāṇḍeya. Dillī: Chaukhambha Sanskrit Pratishthan 2011.
- BhR(Ṭ) *Bhaktirasāyana(ṭīkā)* (Madhusūdana Sarasvatī): *Śrīmadhusūdanasarasvatīpraṇītaṃ Śrīmadbhaktirasāyanam*. Ed. & Com. Janārdhanaśāstrī pāṇḍeya. Vārāṇasī: Motilal Banarsidas 2018 samvat.
- GAD *Gūḍhārthadīpikā* (Madhusūdana Sarasvatī): *Srīmadbhagavadgita with the Commentaries Śrīmadśāṅkarabhāṣya with Ānandagiri, Nīlakanṭhī, Bhāṣyotkarṣadīpikā of Dhanapati, Śrīdhārī, Gītārthasaṃgraha of Abhinavaguptācārya, and Gūḍhārthadīpikā of Madhusūdana with Gūḍhārthattvāloka of Śrīdharmadattaśarmā (Bhachchāśramā)*. Ed. Wāsudev Laxmaṇ Shāstrī Paṇḍīkar, Second Edition, Bombay: Nirṇaya Sāgar Press 1936.
- PBh *Prasthānabhedā* (Madhusūdana Sarasvatī): *Śrīmādhavācārya-praṇītaḥ Sarvadarśanasamgrahaḥ; Madhusūdanasarasvatīkṛtaḥ Prasthānabhedāś ca*. Ed. Vasant Anant Āpte. (Ānanda Āśrama Sanskrit Series 51) Pune: Ānanda Āśrama 1950.
- ŚBhPĀTV **Śrīmadbhāgavataprathamaskhandādyapadyatrayavyākhyā* (Madhusūdana Sarasvatī): See ŚBhPĀTV_D, ŚBhPĀTV_S.
- ŚBhPĀTV_D *The Harilīlāmṛtam by Śrī Bopadeva with Commentary by Śrī Madhusūdana Sarasvatī and Śrī Bhāgavata (First Śloka) with The Paramahamsapriyā commentary by The Same Commentator*. Ed. Parajuli Pandit Devi Datta Upadhyaya (Chowkhamba Sanskrit Series no. 411) Benares: The Chowkhamba Sanskrit Series office 1933. Only on BhP 1.1.1.
- ŚBhPĀTV_S <http://sans.lalitaalaalita.com/2014/07/paramahaMsapriyA-25-.html>. (PDF version: Downloaded from <https://ia902504.us.archive.org/3/items/paramahaMsapriyA-2-shlokaH/paramahaMsapriyA-2-shlokaH.pdf> on the 2nd July 2017); <http://sans.lalitaalaalita.com/2014/07/paramahaMsapriyA-26.html>. (PDF version: Downloaded from [- 19 -](https://ia802509.us.archive.org/31/items/paramahaM-</p></div><div data-bbox=)

sapriyA-3-shlokaH/paramahaMsapriyA-3-shlokaH.pdf on the 2nd July 2017). Only on *Bhāgavatapurāṇa* 1.1.2-3. (本文のページ数は、PDFの枚数を示している.)

二次資料

- Aklujkar, Ashok. 2011. "Unity of the Mīmāṃsās," in *Vācaspati-vaibhavam. In Felicitation of Professor Vachaspati Upadhyaya*, edited by Tripathi, Radhavallabh & Sashiprabha Kumar, New Delhi: D. K. Printworld, pp. 821-900.
- Bhandarkar, R.G. 1982. *Vaiṣṇavism, Śaivism and Minor Religious Systems*, Poona: Bhandarkar Oriental Institute (島岩・池田健太郎訳『ヒンドゥー教——ヴィシュヌとシヴァの宗教』せりか書房, 1984. 本稿でのページ数はこの訳本のもの).
- Bhuvaneshvari, S. 2018. "The authorship of the *Paramahaṃsapriyā* commentary on the *Bhāgavata Purāṇa*," *The Journal of Hindu Studies* 11(2): 168-182.
- Bronkhorst, Johannes. 2007. "Vedānta as Mīmāṃsā," in *Mīmāṃsā and Vedānta: Interaction and Continuity: Papers of the 12th World Sanskrit Conference*, Delhi: Motilal Banarsidass, pp. 1-91.
- . 2014. "Mīmāṃsāsūtra and Brahmasūtra," *Journal of Indian Philosophy* 42: 453-469.
- Gupta, Sanjukta. 2006. *Advaita Vedānta and Vaiṣṇavism: The Philosophy of Madhusūdana Sarasvatī*, London and New York: Routledge.
- Hashimoto, Taigen (橋本泰元), Miyamoto, Hisayoshi (宮本久義), Yamashita, Hiroshi (山下博司) 2005. 『ヒンドゥー教の辞典』東京堂出版.
- Hayashima, Kyosho (早島鏡正), Takasaki, Jikido (高崎直道), Hara, Minoru (原実), Maeda, Sengaku (前田専学) 1982. 『インド思想史』東京大学出版会, pp. 59-71.
- Harimoto, Kengo (張本研吾) 2006. "The Date of Śaṅkara: Between the Cāḷukyas and the Rāṣṭrakūṭas", *Journal of Indological Studies (New title for Studies in the History of Indian Thought)* 18: 85-111.

- Hino, Shoun (日野紹運) 1983. 「ヒンドゥー教の宗教世界——ヴェーダーンタ学匠の教説をめぐって」 *Sambhāṣā* 5: 68-83.
- . 1985. 「ヒンドゥーの宗教世界——不二一元論派学匠マドゥスーダナ・サラスヴァティーのバクティ観をめぐって」 *Sambhāṣā* 6: 22-30.
- Li, Young-soo (李榮洙) 1996. 「シャンカラにおけるバクティの概念——『バガヴァッド・ギーター註解』を中心に——」『インド哲学仏教学研究』4: 29-42.
- Manabe, Tomohiro (眞鍋智裕) 2014. 「マドゥスーダナ・サラスヴァティーの vyūha 説撰取の方法——シャンカラの所説との対比から」『久遠—研究論文集』第5輯:1-19.
- . 2015. 「*Īśvarapratipattiprakāśa* における諸主宰神論の統合方法の解明」 *Waseda Rilas Journal* 3: 29-38.
- . 2016. 「マドゥスーダナ・サラスヴァティーの主宰神論形成に関する一考察」『南アジア古典学』11: 147-168.
- . 2017a. "Madhusūdana Sarasvatī's Interpretation of Viṣṇu," *Journal of Indian and Buddhist Studies (Indogaku Bukkyōgaku Kenkyū)* 65(3): (71)-(76).
- . 2017b. 「*Paramahamsapriyā* における諸典籍の分類について——on *Bhāgavatapurāṇa* 1.1.2」『南アジア古典学』12: 215-234.
- . 2018a. "On the Significance of the *Bhāgavatapurāṇa* in Madhusūdana Sarasvatī's Advaita Doctrine," *Journal of Indian and Buddhist Studies (Indogaku Bukkyōgaku Kenkyū)* 66(3): (42)-(47).
- . 2018b. 「アドヴァイタ的ヴィューハ説の形成過程について」『久遠—研究論文集』第8輯: 22-39.
- . 2018c. 「*Paramahamsapriyā* におけるクリシュナ神—— on *Bhāgavatapurāṇa* 1.1.1 「バクティ派の立場」節解説研究」『南アジア古典学』13: 321-343.
- . 2018d. 「マドゥスーダナのバーガヴァタ・プラーナ註における四姓・四住期制度超克の論理」『論集』第45号: (125)-(144).
- . 2019. "On the Process of the Formulation of the Advaitic *Vyūha* Theory," *Sambhāṣā* 35: 49-71.

- Modi, P. M., trans. 1929. *Translation of Siddhanta Bindu: Being Madhusudana's Commentary on the Das'as'loki of S'ri S'ankaracharya*, First Reprint 1985, Allahabad: Vohra Publishers & Distributors.
- Nakamura, Hajime (中村元) 1951. 『ブラフマ・スートラの哲学〔インド哲学思想第二巻〕』岩波書店.
- Nelson, Lance E. 1986. *Bhakti in Advaita Vedanta: A translation and study of Madhusudana Sarasvati's Bhaktirasayana*. Hamilton: McMaster University (Doctoral Thesis, Unpublished). Downloaded from: <https://macsphere.mcmaster.ca/handle/11375/14225> on the 15th June 2015.
- . 2004. "The Ontology of Bhakti: Devotion as Paramapurusa in Gaudīya Vaisnavism and Madhusūdana Sarasvatī", *Journal of Indian Philosophy* 32: 345-349.
- Raghavan, V. 1978. "Bopadeva", in *Ramayana, Mahabharata and Bhagavata Writers*, edited by Maneesh Shingal and Nitima Shiv Charan, Fourth Reprint, New Delhi: Publications Division, pp. 122-135.
- Tokunaga, Muneo (徳永宗雄) 1989. 「7 バクティ——神への信愛と帰依」長尾雅人等編『岩波講座東洋思想第7巻：インド思想3』岩波書店, pp. 203-235.
- Trigunanasambandam, Sri P. 1968. "Lakṣmīdhara", in *Preceptors of Advaita*, edited by T. M. Mahadevan, Secunderabad: Sri Kanchi Kamakoti Sankara Mandir, pp. 201-205.
- Yoshida, Keno (吉田健翁) 1994. 「シャンカラにおける bhakti の upāsana 的解釈 (3)」『東洋大学大学院紀要：文学研究科』第31集: 230-222.
- Venkatkrishnan, Anand. 2015. *Mīmāṃsā, Vedānta, and the Bhakti Movement*, Columbia: Columbia University. (Doctoral Thesis, Unpublished). Downloaded from: <http://academiccommons.columbia.edu/catalog/ac-%3A189616> on the 9th October 2016.

¹ BhP 1.1.1-3: janmādy asya yato 'nvayād itarataś cārtheṣv abhijñāsa svarāṭ tene brahma hr̥dā ya ādikavaye muhyanti yat sūrayaḥ / tejovārimṛdāṃ yathāvinimayo yatra

trisargo mṛṣā dhāmnā svena sadā nirastakuhakaṃ satyaṃ paraṃ dhīmahi // 1 //
dharmah projjhitaikaitavo 'tra paramo nirmatsarāṇām satām vedyaṃ vāstavam atra va-
stu śivadaṃ tāpatrayonmūlanam / śrīmadbhāgavate mahāmuniḥṛte kiṃ vā parair īśva-
rah sadyo hr̥dy avaruddhyate 'tra kṛtibhiḥ śūsṛūṣubhis tatksaṇāt // 2 // nigamakalpataror
galitaṃ phalaṃ śukamukhād amṛtadrasavasam̐yutam / pibata bhāgavataṃ rasam ālayaṃ
muhur aho rasikā bhuvī bhāvukāḥ // 3 //

² 早島等[1982: 70], 橋本等[2005: 65f.] 等参照. また, MBh の補遺とされる『ハリヴァンシャ』 (*Harivaṃśa*) は, MBh とブラーナ文献の中間的形態を取っているため, 『ハリヴァンシャ・ブラーナ』 (*Harivaṃśapurāṇa*) と呼ばれ, 最古のブラーナ文献と見做されることもある. Bhandarkar[1982: 95], 橋本等[2005: 110f.] 等を参照.

³ 本稿で言う正統派思想とは, インド思想においてヴェーダ聖典の権威を認める「ヴェーダ派」 (*Vaidika*) と総称される諸学派・諸教派のことを指している. 一方, ヴェーダ聖典の権威を認めない「非ヴェーダ派」 (*Avaidika*) には, 唯物論 (*Cārvāka*), 仏教 (*Bauddha*), ジャイナ教 (*Jaina*) が含まれる. なお, 本稿において「インド思想」という場合, キリスト教やイスラーム教等の外来思想, 及びインドにおいて誕生したものであっても, スイーク教は想定していない.

⁴ ヴェーダ聖典は, 「本集」 (*Samhitā*) 文献, 「祭儀書」 (*Brāhmaṇa*) 文献, 「森林書」 (*Āraṇyaka*) 文献, 「奥義書」 (*Upaniṣad*) 文献から成り, 狭義には「本集」文献のみを指す. 早島等[1982: 9f.]

⁵ この年代は, シャンカラによる BSBh 執筆年代を考察した Harimoto[2006] に依る.

⁶ BS, ウパニシャッド文献群, BhG は, 後に「三種の体系」 (*prasthānatraya*) と呼ばれるようになる.

⁷ 13-14 世紀頃の不二元論学匠ヴィディヤーラニヤ (*Vidyāraṇya*) は, その著『生前解脱の検討』 (*Jīvanmuktiviveka*) において, ヨーガの文脈で BhP を度々議論の根拠として引用している. また, 14-15 世紀頃の不二元論学匠ラクシュミダラ (*Lakṣmīdhara*) は『主の名の月光』 (*Bhagavannāmakāumudī*) を著しているが, これは BhP に依拠しているとされる. Thirgunanasambandam[1968: 201-205], Venkatkrishnan[2015: 68-126] 参照. このように, 14 世紀以降, マドゥスーダナ以前にも, 不二元論学派の中で BhP を重視する傾向が顕れている. また, マドゥスーダナの『バーガヴァタ註』は, ヴィシュヌ教徒であるヴォーパデーヴァ (*Vopadeva* or *Bopadeva*, ca. 12th-13th) によって著された, BhP の趣意をまとめた『ムクターバラ』 (*Muktāphala*) とシュリーダラ・スヴァーミン (*Śrīdhara Svāmin*, ca. 1350-1450, 以後シュリーダラと表記) による BhP に対する註釈『明らかな意味の顕示』 (*Bhāvārthadīpikā*, 以後 BhAD と表記) の影響を受けている. ヴォーパデーヴァとシュリーダラは, 不二元論学派とは少し異なった不二元思想を奉じていた. Raghavan[1978: 125], Venkatkrishnan[2015: fn. 534] 参照.

⁸ マドゥスーダナの BhP に対する註釈の名称は, 正確には分かっていない. 従来は *Paramahamsapriyā* という名称で知られていたが, Bhuvaneshvarī[2018]

は、この名称が誤って帰されてきたことを論じている。本稿では、コロフォンに見られる "śrīmadbhāgavataprathamaskhandhasyādyapadyatrayavyākhyā" という記述から、*Śrīmadbhāgavataprathamaskhandādyapadyatrayavyākhyā* という名称を想定している。

⁹ ラクシュミーダラは、BhP に対して未完の註釈『アムリタの河』 (*Amṛtaraṅgīnī*) を著したと言われているが、未だ出版されておらず、また写本情報も不明である。Thirgunanasambandam[1968: 201], Venkatkrishnan [2015: 71] 参照。また、13 世紀頃の不二一元論学匠チツカ (Citsukha) と生没年不詳のプニヤーラニヤ (Punyāranya) が BhP に対して註釈を著したと言われているが、この点に対しては疑念も示されている。Venkatkrishnan[2015: 41] 参照。しかし、Citsukha の BhP に対する註釈は、British Library において存在が確かめられている。テキストの出版や研究は未だなされていないため、今後の研究の進展が期待される。

¹⁰ ヴィシュヌ教における BhP の重要性に関しては、徳永[1989: 226-231, fn. (30)] を参照。

¹¹ 『バーガヴァタ註』に対する先行研究には、以下のものがある。Modi[1929: 43-45], Raghavan[1978], Venkatkrishnan[2015: 195-204], 眞鍋[2014], [2015], [2017b], [2018b], [2018c], [2018d], Manabe[2017a], [2018a], [2019], Bhuvaneshwari[2018].

¹² 『バーガヴァタ註』全体を逐次検討することは紙幅の制約上不可能であるので、本稿ではマドゥッサーダナがどのように BhP を受容していったのか、という点に深く関わる議論を中心に扱う。

¹³ PBh 1,46: ṛgvedo yajurvedaḥ sāmavedo 'tharvaveda iti vedāś catvārah śikṣā kalpo vyākaraṇaṃ nirkutam chando jyotiṣam iti vedāṅgāni ṣaṭ. purāṇāni nyāyo mīmāṃsā dharmasāstrāṇi ceti catvāry upāṅgāni (リグ・ヴェーダ、ヤジュル・ヴェーダ、サーマ・ヴェーダ、アタルヴァ・ヴェーダというのが、四つのヴェーダである。音声学、律法学、文法学、語源学、韻律学、天文学というのが、六つのヴェーダの補助学 (vedāṅga) である。諸ブラーナ、ニヤーヤ、ミーマーンサー、諸法典が、四つの副補助学 (upāṅga) である)。

¹⁴ 例えば、以下のように述べられている。ŚBhPĀTV 9,8-10 (on BhP 1.1.3): tāvat prathamāślokena śāstrārthasya paramapuruṣāvayavatvam uktam. dvitīyāślokena śāstrasya paramapuruṣāpekṣasādhanaṭvam. "śāstram eva paramapuruṣārthaḥ" iti tṛtīyāślokena āha (先ず、第一頌によって、教示書 (BhP) の対象が最高のプルシヤの側面であることが述べられた。第二頌によって、教示書が最高のプルシヤに依存する達成手段であることが [述べられた]。 「教示書こそが最高の人間の目的である」ということを、第三頌によって述べる)。

¹⁵ 本稿 2.3 を参照。

¹⁶ 特に、BhP 1.1.1 に対する『バーガヴァタ註』において、BhP 1.1.1 が BhP 全体の趣旨を要約している、という註釈が見られる。ŚBhPĀTV 68,24-69,9.

¹⁷ ŚBhPĀTV 58,14-16 (on BhP 1.1.1): kṛtsnagranthatātparavyaiṣayībhūtam arthaṃ darśayan bhagavān bādārāyaṇis tam eva dhyeyatvenopaśikṣayan maṅgalam ācaratī - **janmādy asyeti. taṃ paraṃ satyaṃ dhīmahīti** sambandhaḥ ([BhP の] 全文章の趣旨の対象となるものを示して、主バーダラーヤニ (ヴィヤーサ) は、同じそ

れを瞑想されるべきものとして教示するために、吉祥句 (BhP 1.1.1) を述べる。これの生起等、と。その最高の真理を瞑想しよう、と結びつく)。

¹⁸ 『バーガヴァタ註』には、この立場は「信愛のみを愉しむ者達」(kevala-bhaktirasikāh)、あるいは「プラーナ学派」(paurāṇika) としか述べられていない。しかし後に見るように、BhP 1.1.2 において、信愛の達成手段である「バーガヴァタの規範」(bhāgavatadharmā) という語が見られ、この「信愛のみを愉しむ者」とは、「バーガヴァタの規範」の従事者、即ちバーガヴァタ派のことを指していると考えられる。

¹⁹ ŚBhPĀTV 58,16-22 (on BhP 1.1.1): **satyam** abādhyam ... tathā ca śrutiḥ "satyasya satyam iti prāṇā vai satyaḥ teṣām eṣa satyam" (*Bṛhadāraṇyakopaniṣad* 2.1.20) iti prāṇaśabdoditānāṃ vyavahārataḥ satyānāṃ adhiṣṭhānabhūtaṃ paramārthasatyam ātmānaṃ darśayati. evaṃ "satyaṃ jñānaṃ anantaṃ brahma" (*Taittirīyopaniṣad* 2.1), "aitadātmyam idaṃ sarvaṃ tat satyaṃ sa ātmā tat tvam asi" (*Chāndogyoṇiṣad* 6.8.7) ityādiśrutir api brahmātmāśabdoditaṃ **paraṃ** tattvaṃ abādhyam darśayati (真理とは拒斥されないものである。……そして同様に、天啓聖典は、「真理の真理である。よって、実に真理は諸の生氣であり、これ(アートマン)はこれら(諸生氣)にとって真理である」と、生氣という語によって述べられた、言語活動上の諸の真理の基盤である勝義の真理をアートマンであると示している。同様に、「ブラフマンは真理であり、知であり、無限である」、「この一切は、これを本質としている。それは真理であり、それは自己(アートマン)である。汝はそれである」等という天啓聖典も、ブラフマンやアートマンという語によって述べられた最高の真実を、拒斥されないものであると示している)。

²⁰ 『チャンドーギヤ・ウパニシャッド』(*Chāndogyoṇiṣad*) 第六章に繰り返し見られる表現である。

²¹ ŚBhPĀTV 59,19-21 (on BhP 1.1.1): śuddhasya brahmaṇo nididhyāsyamānasya paramārthasatyatām upapādayitum tatpadārthasvarūpatām āha – **janmādy asya yata ityādinā** (以上のように、清浄で、熟考されるブラフマンが勝義の真理であることを論拠づけるために、[ブラフマンが「汝はそれである」(tat tvam asi)の]「それ」という語の対象をそれ自体とすることを述べる。それから、これの生起等が、等ということによって)、ŚBhPĀTV 63,12-14 (on BhP 1.1.1): evaṃ pūrvārdhena tatpadavācyārtham uktvāparārdhena tallakṣyaṃ vaktum ārabhamāṇaḥ "adhyāropāpavādābhyāṃ niṣprapañcam prapañcyate" iti nyāyenāha – **tejovārityādinā** (以上のように、[BhP 1.1.1 の]前半部によって[「汝はそれである」という文章の]「それ」という語によって直接表示される意味内容を述べて、後半部によって、それ(「それ」という語)によって間接表示されるものの言及を開始するために、「仮託と撥無によって、多様化していないものを多様化する」という解釈原則によって述べる。火、水等によって)、ŚBhPĀTV 65,9f. (on BhP 1.1.1): atha ca tvampadārtho 'pi śakyate 'nena ślokena darśayitum (また、「汝」という語の意味内容も、この頌(BhP 1.1.1)によって示され得る)、ŚBhPĀTV 67,12-14 (on BhP 1.1.1): evaṃ tvampadavācyārtham pūrvārdhena pratipādyā, tallakṣyaṃ uttarārdhena vaktum adhyāropāpavādānyāyenārabhate – **tejovārimṛdāṃ yathāvinimaya ityādinā** (以上のように、「汝」という語によって

直接表示される意味内容を、[BhP 1.1.1 の]前半部によって解説してから、それ（「汝」という語）によって間接表示されるものを、後半部で、仮託と撥無の解釈原則によって述べることを開始する。火、水、土の交替に応じて等ということによって）。また、眞鍋[2015: 37-39] 参照。

²² 眞鍋[2014] 参照。

²³ 眞鍋[2014], [2015], [2016], [2018b], [2019] 参照。

²⁴ ŚBhPĀTV 70,7-26. この点に関して、別稿を予定している。

²⁵ ŚBhPĀTV 71,4-8 (on BhP 1.1.1): kevalabhaktirasikās tu kevalavāsudevāvātāraśrī-krṣṇaparayatā yojayanti ... tasmāt tatparatayaiva sarvāṇi padāni yojanīyāni. taṃ **pa-ram saṭyaṃ** vāsudevātmakam śrīkrṣṇam vyaṃ dhyāyema (一方、信愛のみを愉しむ者達は、独りヴァースデーヴァの化身である聖クリシュナを主眼とするものとして [プラーナの言葉を] 結びつける。……それ故に、彼を主眼とするものとしてのみ、[BhP の] 全ての語が結びつけられるべきである。その最高の真理である、ヴァースデーヴァを本性とする聖クリシュナを、私達は瞑想しよう)。

²⁶ ŚBhPĀTV 73,20-22 (on BhP 1.1.1): evaṃ ca sarvapriyatvena paramānandarūpas sarvajñas sarvaśaktis sarvamohanaḥ sarvasukhapradas sarvāparādhasahiṣṇus sarvātmā paramakārūniko vidagdhataraś ca śrīkrṣṇo bhaktirasālambanatvena sampūrṇagrānthapratipādyā iti dhvanitam (そして以上のように、全てのものにとって愛しいので最高の歓喜をあり方とし、全知者であり、全能者であり、一切のものを惑わせ、一切のものに樂を与え、一切の罪過に忍耐強く、一切のもののアートマンであり、最高に慈悲深い、勝れて巧妙である聖クリシュナは、信愛の情趣の拠所として、文章全体によって理解されるべきである、ということが暗に示された)。また、ここまでの議論に関して眞鍋[2018c] 参照。

²⁷ ただし、不二一元論学派の立場において引用される諸ウパニシャッドは古層に属するものであるのに対し、サートヴァタ派の立場において引用されるウパニシャッドは、比較的新しい、ヴィシュヌ教系のウパニシャッドである『ヌリシンハ・ターパニーヤ・ウパニシャッド』(Nṛsimhatāpanīyopaniṣad) であるという違いはある。

²⁸ Manabe[2017a] 参照。

²⁹ BhG 4.6 に対する『ギーター註』において、マドゥスーダナは自身のクリシュナ神観を述べた後、シャンカラの BhGBh の文を典拠として引用している。GAD 188,16-18: uktaṃ ca bhagavatā bhāṣyakāreṇa – "sa ca bhagavān jñānaiśvaryaśaktībalavīryatejobhiḥ sadā sampannas triṅṇātmikāṃ vaiṣṇavīm svām māyām prakṛtiṃ vaśīkrītyājo 'vyayo bhūtānām īśvaro nityasuddhabuddhamuktasvabhāvo 'pi san svamāyayā dehavān iva jāta iva ca lokānugrahaṃ kurvan lakṣyate svaprayojanābhāve 'pi bhūtānūjighrṣayā" (BhGBh Upodghāta) iti (また、尊き註釈作者(シャンカラ)によって説かれている。「そして彼の主は、知・主宰力・能力・強さ・勇敢さ・威光を常に備えており、三属性を本性とし、ヴィシュヌ神に属す自身のマーヤーである原質を制御して、不生で、不滅で、生類の主宰神であり、常住・清浄・覚醒した・解脱した自性を有していても、世間に恩寵を施す者として、自身のマーヤーによって、身体を持っているかのように、また生じたかのように [人々に] 思われている。[それは] 自身の目的がないとして

も、生類に恩寵を施すためである」と)。

³⁰ ŚBhPĀTV 73,24 (on BhP 1.1.1): arthabhedah kathamcana pratipattñām vicitraprajñānām vinodāya ([BhP1.1.1 に対する何通りかの] 意味の違いは、何らかの仕方理解する多様な知力を持つ者達を喜ばせるためにある) 。

³¹ Venkatkrishnan[2015: 201f.], 眞鍋[2017b] 参照。

³² 眞鍋[2017b] 参照。

³³ 以上の三分類は、シュリーダラ・スヴァーミンの BhAD を踏まえている。眞鍋[2017b: 215-222] 参照。

³⁴ 中村[1951: 35-42, 58-79] 参照。この広義のミーマーンサー学派という考え方に対して Bronkhorst 教授はそのような学派が存在しないことを論じており、さらにその Bronkhorst 教授に対して Aklujkar 教授は Bronkhorst 教授の主張は認められないと反論し、論争が起こっている。Bronkhorst [2007], [2014], Aklujkar [2011] 等を参照。本稿では、マドゥスーダナがミーマーンサー学派とヴェーダーンタ学派を一体のものと考えているため、マドゥスーダナの見解に従って両学派を合わせたものを広義のミーマーンサー学派と考える。眞鍋[2017b: fn. 5] 参照。

³⁵ この点に関しては、眞鍋[2017b: 222-232] 参照。

³⁶ ŚBhPĀTV 2,12-20 (on BhP 1.1.2): tathā ca vakṣyati – sa vai pumsām paro dharmo yato bhaktir adhokṣaje / ahaituky apratihātā yayātmā suprasāditi // BhP 1.2.6 // iti. etena manvādīdharmaśāstrair agatārthatvam uktam. tatra – śravaṇam kīrtanam viṣṇoḥ smaraṇam pādasevanam / arcanam vandanam dāsyam sakhyaṁ ātmanivedanam // BhP 7.5.23 // ityādībhāgavatadharmāpratipādanāt (そして同様に(主の規範が最高のものであると) [ヴィヤーサ仙は] 述べるだろう。「アドークシャジャ(クリシュナ神)に対する、根拠のない、障壁のない信愛がそれから生じ、自身がそれによって非常に清澄になるもの、実にそれが人々にとっての最高の規範である」と。このことによって、マヌ等という諸法典によって、[BhP の] 目的が果たされていないことが述べられた。そこ(マヌ等という諸法典において、「ヴィシュヌ [神] に関して、聞くこと、讃えること、想起すること、もてなすこと、供養すること、崇拜すること、隷属すること、親密であること、身体を捧げること」等という主の規範が教えられていないから)。

³⁷ 以上のことに関して、眞鍋[2018d] 参照。

³⁸ ŚBhPĀTV 1,7-9 (on BhP 1.1.2): atra pratipādyānām śravaṇakīrtanādīlakṣaṇānām dharmānām bahutve 'pi, bhagavatsvarūpaprapītilakṣaṇaphalākhyāt ekatvam. tathā caikaphalako dharmarāśiḥ atra partipādyate. karmakāṇḍātmakadharmāśāstreṣu ca vibhinnaḥ phalānām dharmānām pratipādanāt, na paunaruktyam (ここ(BhP)において、説かれるべき、聴聞と称賛等を特徴とする諸の規範が多いとしても、主の本質の獲得を特徴とする果報は一つであるので、[諸の規範の果報は] 一つである。[よって、BhP において規範は単数形で表されている。] 即ち、一つのを果報とする規範の集りが、ここ(BhP)において説かれている。そして、[祭祀] 行為篇を本性とする諸の法典においては、別々のものを果報とする諸規範が教えられているので、[主の規範はそれらの] 再言及ではない)。

また、ここで「主の本質の獲得」とは、「結果としての信愛」を指している

ると考えられる。

³⁹ MBh に関しては、以下を参照。ŚBhPĀTV 2,27-29 (on BhP 1.1.2): kaitvaṃ kapaṭam yudhiṣṭhīrādicaritavyājah. tad bhāgavatātātparyakatve 'pi mahābhārate 'sti. na cātra kaścīd vyājo 'stīti prādhānyena bhāgavatadharmavarṇanam asyārthaḥ (欺瞞とは詐欺であり、ユディシュティラ等の行状という口実のための嘘である。それ(口実のための嘘)は、主[の規範]を趣意としているとしても、『マハーバーラタ』において存在する。しかし、ここ[バーガヴァタ]においては如何なる口実のための嘘も存在しないので、主の規範の記述がこれ[バーガヴァタ]の主要な(prādhānyena)目的である)。また VP に関しては、眞鍋[2018d]を参照。

⁴⁰ ŚBhPĀTV 4,25f. (on BhP 1.1.2): yad vāstavam abādhyam vastu prathamāśloke darśitam, tad atra granthe vedyaṃ vedanārham. sarveṣām iti śeṣaḥ (実際に存在する、即ち拒斥されない実在物であり、第一頌において示されたものが、ここにおいて、即ち[この]著作において知られるべきである、即ち知られるに値する。一切のものに、と補われる)。

⁴¹ 眞鍋[2017b: 228-230], Manabe[2018a: (43)f., fn. 9] 参照。

⁴² マドゥスーダナは、ヴィヤーサ仙と BS の作者とされるバーダラーヤナ (Bādarāyaṇa) を同一人物と考えていたようである。本稿 fn. 43 参照。

⁴³ ŚBhPĀTV 5,21-6,2 (on BhP 1.1.2): nanv evaṃ saty abhinavakavikāvyaśyāpi brahmapratipādakasya strīśūdrādisraṇayogyatvenaitattulyatā syād ity āśaṅkya, āha – mahāmunikṛta iti. mahān bhagavadavatāratvād bhagavān bādarāyaṇaḥ. sa eva muñih, satatam mananaśīlatvāt. tenāpi nārādopadeśam āśādyā racitam etat. tathā coktam – aṣṭādaśapurāṇānām kartā satyavatīśuṭaḥ / kṛṣṇadvaipāyanam vyāsam viddhi nārāyaṇam svayam // iti. itihāśapurāṇam ca paṃcamo veda ucyate // BhP 1.4.20cd // iti ca. tathā ca vyāsakarṭṭvasāmye 'pi vedasamākhyanāc(°sāmākhyanāc^{sic}) caturlakṣaṇmīmāṃsāto 'py utkṛṣṭam etat. kim uta abhinavakāvyaḍ(°kāvyaḍ) ity arthaḥ (【反論】そのようであれば、ブラフマンを理解させる現代の詩人の美文体詩も、女性やシュードラ等にとっての聴聞に適合するので、これ(BhP)と等しいことになってしまう、という[反論を]想定して、【答】答える。偉大な聖仙によって作られたものにおいて、と。偉大な者とは、主の化身であるので主であるバーダラーヤナである。彼こそが聖仙である。常に思惟することを性向としているから。彼によってもナーラダの教示が得られて、これ(BhP)が作られた。また同様に述べられている。「18 プラーナの作者は、サティヤヴァティーの息子である」、「クリシュナ・ドゥヴァイパーヤナであるヴィヤーサを、ナーラーヤナ自身と知れ」と。また、「叙事詩とプラーナは、第五のヴェーダであると言われる」と。即ち、ヴィヤーサが作者であることは等しいとしても、ヴェーダを教示する『四篇から成る考究』(BS)よりも、これ(BhP)は優れている。況や現代の美文体詩よりも尚更[優れている]という意味である)。

⁴⁴ 「第五のヴェーダ」という表現は、四つのヴェーダを前提としている。通常四ヴェーダという場合、『リグ・ヴェーダ』(Rgveda)、『サーマ・ヴェーダ』(Sāmaveda)、『ヤジュル・ヴェーダ』(Yajurveda)、『アタルヴァ・ヴェーダ』(Atharvaveda)のことを指す。本稿 fn. 13 を参照。

⁴⁵ ŚBhPĀTV 6,5 (on BhP 1.1.2): **parair** etadbhinnaiḥ nāradaṣṣarātrādibhir grānthaiḥ (諸の他のものによって、とは、これ (BhP) とは異なった『ナーラダ・パンチャラートラ』等という著作によって、ということである)、ŚBhPĀTV 6,22 (on BhP 1.1.2): tat kiṃ pañcarātrādevatākāṇḍaṃ sarvathānapekṣitam eva. tathā ca tadārambho vyarthah (【反論】では一体、パンチャラートラ等という神格篇が、全面的に顧みられないものに他ならず、そして、それ(神格篇)の開始は無意味となるのか)。また、BhP1.1.1 に対する『パーガヴァタ註』においても、サートヴァタ派(パンチャラートラ派)のヴィニューハ説は、念想を目的としていると述べられている。ŚBhPĀTV 70,1f. (on BhP 1.1.1): dhyānam atropāsanarūpam evādhīpretam, caturvyūharacanāyā upāsanārthatvāt (ここで、瞑想とは念想をあり方とすることのみが意図されている。四つのヴィニューハの構成は、念想を目的とするから)。また真鍋[2017b: 230f.] 参照。

⁴⁶ ŚBhPĀTV 59,8f. (on BhP 1.1.1): upāsanam tu vastusvarūpānapekṣaṃ puruṣecchāmātram tanmānasakriyāpravāharūpam.

⁴⁷ ŚBhPĀTV 6,10-22 (on BhP 1.1.2): **īśvaraḥ** paramātmā vāsudevākhyah prathamaślokkta etadgranthaśravaṇecchāvadbhir api **hr̥dy avarudhyate** premarasanayā badhyate, kiṃ punaḥ śravaṇaparaiḥ. tad api na vilambena. kiṃ tu **sadyah, tatkṣaṇād** iti padadvayopādānam atīśaighryasūcanāya. **īśvaraḥ** svatantraḥ. tasyāvarodhanaṃ svādhīnatayāvasthāpanam. tad api na vistrte deṣe. kiṃ tu sv**hr̥dy** atisaṃkucite sthāne. tad api śravaṇecchāmātreṇaiveti kiyān atīśayo vaktum śakyah (主宰神、即ち最高のアートマンであり、第一頌で説かれたヴァースデーヴァと呼ばれる者は、この著作の聴聞に対する意欲を持つ者たちによっても、心に留めおかれる、即ち愛情という綱によって繋ぎ止められる。況や聴聞に専念するものたちによつては尚更 [留めおかれる]。それも、ゆつくりとではない。そうではなくて、即座に、その瞬間に、である。以上の二つの語の使用は、非常に速いことを示唆するためにある。主宰神は自律的なものである。彼を留めおくことは、[信者]自身に依存したものと(自身の中に)固定せしめることである。それも広範な場所に、ではない。そうではなくて、自身の心に、即ち非常に閉じた場所に、である。そのこと(主宰神が即座に心に留めおかれること)もまた、単に聴聞を望むことのみによるので、どれ程の卓越性が述べられ得ようか)。

⁴⁸ BhRT 21,2f.: bhajanam antaḥkaraṇasya bhagavadākārātārūpam bhaktir iti bhavyvyutpattiyā bhaktiśabdena phalam abhidhīyate (信愛とは、内官が主を形相とすることをあり方とする信愛すること (bhajana) である、という行為による語源解釈 (bhāvavyutpatti) によって、「信愛」という語で結果が表詮されている)、BhRT 26,9-27,2: dravībhāvapūrvikā hi manaso bhagavadākārātā savikalpaka-vṛttirūpā bhaktiḥ (実に、蕩けることに基づく、構想を伴う [心的] 活動をあり方とする、思考器官が主を形相とすることが信愛である)。

⁴⁹ BhR 1.3: drutasya bhagavaddharmād dhārāvāhikatām gatā / sarveṣe manaso vṛttir bhaktir ity abhidhīyate // (全てのものの主に対する、主の規範に基づいて蕩けた思考器官の、流れを持つものとなった活動が信愛である、と表述される)。

⁵⁰ BhRT 42,4f.: **praṇayo** drāvavasthā sa eva **raśanā** rajjuvad bandhanasādhanam, tasyāṃ drāvavasthāyāṃ praviṣṭasya punar nirgamanābhāvād ity arthah (愛情とは [心

の] 蕩けの状態であり、同じそれが綱であり、縄のように結束の手段である。その蕩けの状態において入り込んだものが、再び外に出ることはないから、という意味である)。

⁵¹ しかし、『バーガヴァタ註』において、ブラフマンの知に対する有資格者が性別・階級に制限されていない点は、従来有資格者を男性の上位三階級のみに限定してきた伝統的な立場とは相違している。

⁵² この点に関しては、別稿において詳細に論ずる予定である。

⁵³ ŚBhPĀTV 12,22f. (on BhP 1.1.3): atra ca bhaktirasānubhavāsādhāraṇakāraṇatvena, bhāgavatasya rasatādātmyavivakṣayā, sāmānādhikaranyam. rasasya tattādātmyena bhāgavatākhyam purānam api paramaḥ pumarthaḥ (そしてここにおいて、信愛の情趣の直接経験の独自の原因であるので、バーガヴァタが情趣と同一であることを述べようとして同格関係がある。情趣がそれ(バーガヴァタ)と同一であるので、バーガヴァタと呼ばれるプラーナも最高の人間の目的である)。

⁵⁴ Nelson[1986: 154-159] 参照。

⁵⁵ ŚBhPĀTV 9,11-10,6 (on BhP 1.1.3): nigamo vedaḥ. sa eva kalpataruḥ. bahuśākhavāt, aśeṣapumarthapradātṛtvāc ca. tasya phalaṁ sārabhūtam. bhāgavatam asādhāraṇyena bhagavatpratipādakaṁ purānam. punaḥ punar vedam ālocya racitatvāt, tasya vedaphalatvam. sarvavedārthasya rasasamgrahabhūtam ity arthaḥ ... bhagavadbha-kteḥ sarvavedārthasārātṛtvāt, tatpratipādakam idaṁ sarvataḥ sārabhūtam. piḅata samsāratāparūpapipāsopaśāntaye śravanaputaiḥ sarvaṁ hrdgatam kuruta (聖句とはヴェーダである。それこそが如意樹である。多くの枝派を持っているから、また全ての人間の目的を授けるから。それ(ヴェーダ)の果実は果汁のようである。バーガヴァタ[・プラーナ]とは、独自に主を教示するプラーナである。

[バーガヴァタは] 何度も何度もヴェーダを考察して作られたものなので、それ(バーガヴァタ)はヴェーダの果実(結果)である。全てのヴェーダの意味内容の、精要をまとめたものに相当する、という意味である。……主に対する信愛は、全てのヴェーダの意味内容の精要であるから、それを教示するこれ(バーガヴァタ)は、あらゆる点で果汁のようなものである。飲め、とは、輪廻の苦しみをあり方とする渴望の止滅のために、耳という諸の器によって、一切を心にあるものとせよ、ということである)。

⁵⁶ ŚBhPĀTV 10,20-22 (on BhP 1.1.3): amṛtaṁ mokṣaḥ, tasya dravaḥ gatiḥ prāptiḥ, tatsahitam iti paramārthakalpataruphalasyāmṛtasvādutvena(°amṛtsvādutvena^{sic}) prasi-ddhatvāt, amṛtadravasamyutatvam. (アムリタとは解脱であり、その滴り、即ち[我々が解脱に]行くこと、到達することであり、[果実は]それ(解脱の到達)と結びついている。よって、最高の目的である如意樹の果実は、アムリタによって美味であると周知されているから、アムリタの滴りを持つている、ということである)。

⁵⁷ ŚBhPĀTV 11,2-4 (on BhP 1.1.3): ālayam iti. layo mokṣaḥ, tam abhivyāpya ity arthaḥ. etatpānasyaiva mokṣahetutvāt, anāyāsena mokṣaḥ sampatsyata ity amṛtadravasamyutam ity atra sūcitam (帰滅するまで、とは、帰滅とは解脱であり、その時点まで、という意味である。他ならぬこれを飲むことが解脱の原因であるので、容易に解脱が実現するだろう、ということが、アムリタの滴りを持つ、とここ(バーガヴァタ)では示唆されている)。

⁵⁸ この主への信愛が心の帰滅の原因である、という点に関しては、まだ十分に理解できていない。今後の研究課題としたい。なお、手段としての信愛の結果、蕩けた心が主を形相とするという結果としての信愛が生じるため、心が蕩けることを「帰滅」と呼んでいるということが想定される。しかし、信愛の情趣は、結果としての信愛の段階において生じるものとされているため、手段としての信愛の結果、心の帰滅が生じるとは考え難い。

⁵⁹ ŚBhPĀTV 11,15-18 (on BhP 1.1.3): nirgalitās tu he **rasikāḥ bhāvakāḥ bhāgavatam** bhagavadviṣayaṃ **rasam** bhagavadbhaktiyākhyam **pibata** āsvādayata. **ālayam** manolayaparyantam, bhagavadbhaktirasasya manolayahetutvāt. tasya paramadurlabhatvam āha – **phalam** iti sarvasukṛtakarmaphalabhūtam (一方、[心の] 溶けた者達よ、おお、情趣に通じた者達よ、審美者達よ、バーガヴァタを、即ち主を対象とする情趣を、つまり主への信愛と呼ばれるものを飲み、即ち味わえ。帰滅するまで、とは、思考器官が帰滅するまで、ということである。主への信愛という情趣は思考器官の帰滅の原因であるから。それが最高に得難いことを述べる。結果を、とは、全ての善く行われた行為の結果たるものである)。

⁶⁰ ŚBhPĀTV 11,22-12,2 (on BhP 1.1.3): etādṛṣasyāpi prāptau drṣṭopāyam āha – **nigamakalpapataroḥ. nigamo** bhāgavatākhyah pañcamo vedah. sa eva **kalpataruḥ**, anekaskandhaśobhitatvāt. tasmād **galitam** bhāgavatātmanā mahākāvyaena vyañjitam ity arthaḥ (このようなものであっても、獲得について、既知の手段があることを述べる。聖句という如意樹から [と]。聖句とは、バーガヴァタと呼ばれる第五のヴェーダである。それこそが如意樹である。多くの枝によって荘厳されているから(多くの支派によって崇敬されているから)。それ(聖句である如意樹)から溢れた、とは、バーガヴァタを本性とする偉大な美文詩によって詩的に表現された、という意味である)。

⁶¹ 不二一元論学派の立場における註釈で見たように、BhP では「アムリタの滴りと結びついた」(amṛtadravasamṣyutam) という一つの複合語であるが、マドゥスーダナはこの複合語を amṛtadravasam と yutam という二語に分解して註釈をしている。

⁶² ŚBhPĀTV 12,7 (on BhP 1.1.3): **amṛtadravo** devabhogyo raso mokṣagatiḥ ca. tam syati khaṇḍayati nikṛṣṭatām āpādayatīti tathā (アムリタの滴りの柵を [と]。アムリタの滴りとは、神によって享受される精要であり、また解脱の境地である。それを終わらせる、壊す、劣ったものとする、そのように、である)。

⁶³ ŚBhPĀTV 12,7f.: bhaktirasānubhave svargamokṣayoḥ vācānudayāt (信愛の情趣を直接経験する場合、天界と解脱に関する言及は生じないから)。

⁶⁴ マドゥスーダナは、BhP 4.9.10,と 6.11.25 を典拠として挙げている。また、徳永[1989: 228] 参照。

⁶⁵ BhRṬ 27,4f.: bhagavadviṣayakapremaprakarṣo bhaktiphalam (主を対象とする愛の高まりが、信愛の結果である)。

⁶⁶ BhRṬ 137,5: premno 'tha paramā kāsthā prānaparityāgāvadhivirahāśiṣṇutārūpā (また、愛の最高の極地とは、生命の放棄を終端とする(主との)別離に耐えられないことをあり方とする)。

⁶⁷ Nelson[1986: 194-198], [2004: 384-388], Gupta[2006: 131-136] 参照。

⁶⁸ BhRṬ 26,1-9: nanu tarhi nāmāntareṇa brahmavidyaiva bhagavadbhaktir ity uktam ... na, svarūpasādhanaphalādhikārivailakṣaṇyād bhaktibrahmavidyayoḥ (【反論】その場合、別の名称を用いて、ブラフマンの明知こそが主への信愛である、と言われた。……【答】そうではない。信愛とブラフマンの明知とは、本質・手段・結果・有資格者が異なっているから)。

⁶⁹ BhRṬ 85,12f.: bhāgavatasya bhagavaddharmānuṣṭhātuḥ prathamam bhagavatprabodhas tataḥ paraṁ vairāgyam tataḥ premalakṣaṇā bhaktiḥ (バーガヴァタ、即ち主の規範の遂行者には、先ず主の理解があり、それから最高の離欲があり、それから愛を定義的特質とする信愛がある)。しかし、この主の理解によって解脱することは、BhR(T) においては説かれていない。

⁷⁰ 確かに、BhP 1.1.1 に対する『バーガヴァタ註』においては、サートヴァタ派の立場からの解釈も行ってた。このサートヴァタ派とは、パンチャラートラ派を不二元論学術的に解釈したものであった。この立場における最高の真理であるヴァースデーヴァ神は、不二元論学派の立場における最高の真理であるブラフマンと、バーガヴァタ派の立場における最高の真理であるクリシュナ神とを架橋する役割を果たしていると考えられる。

⁷¹ 吉田[1994]、李[1996]、日野[1983] 等を参照。

⁷² マドゥスーダナは、ヴィシュヌ教諸派の中では、ヴェーダーンタ学派内の二元論 (Dvaita) 学派でもあるマドゥヴァ (Madhuva) 派を特に批判対象としていた。また、『バーガヴァタ註』において度々登場するパンチャラートラ派は、その系譜に位置するラーマヌジャ (Rāmānuja) 派を暗に想定しているのではないかと考えられる。さらに、彼は『シヴァ・マヒナ・ストートラ』 (Śivamahimnastotra) に対して註釈を著しているが、これはシヴァ教諸派に対する牽制であると考えることができよう。

⁷³ 日野[1985]、Nelson[1986]、[2004]、Gupta[2006: 119-144] 参照。